

アンテナからは随 分と離れたところ まで歩いてきた

※この作品は著者の想像などから作ったフィクションであり、内容などは架空のものです。

怖かったが・・・・・・・・。

肩は少し震え、息は上がっている。

・・・・・・・・内面まで入り込まれ思考までズレさせられていたが・・・・・・・・。

随分と遠いところまで走って逃げてきた。

ほとんど届いてはいない。

あとは顔・・・・全身にへばりついた埃のようなものを払うというか消えていくのを待つだけとなった。

・・・・・・・・・煙突から上る湯気の粒子のように。

マウントをとられ馬乗りにされ本来の自分を失うと
というようなケースも時に理不尽な社会ではごまんと
ある。

時代も相まってまるで碁盤の目のように、

白黒の分離・・・・・・・・・・。

崖から落ちると言うよりは、

開花するようなリズム。

体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました。